**〔解説〕**

文政八年(一八二五)七月、江戸中村座で上演された、鶴屋南北の傑作「東海道四谷怪談」を浄瑠璃に仕立てたもの。江戸、四谷左門町に住んでいた田宮伊右衛門と妻のお岩の伝説を、「仮名手本忠臣蔵」の外伝という体裁で描いています。歌舞伎では、お岩を三代目尾上菊五郎、伊右衛門を七代目市川団十郎が演じ、当時、江戸中の人気をさらうほどの大ヒットとなりました。浄瑠璃化の初演は、天保二年(一八三一)七月、御霊境内の操り芝居で、作者は不明ですが、南北の作とは構成に大きな相違がありました。

**〔伊右衛門住家の段　あらすじ〕**

持病の逆上（のぼせ）で苦しんでいた於岩は、水庵からもらった薬を飲んでいます。（お岩に横恋慕している権平が忍び込んできて、お岩に冷たくあしらわれると、お岩の夫・伊右衛門が奥村の娘・小梅と深い仲になっており、水庵と謀ってお岩に毒薬を与えていることを告げます。）

外出していた奉公人の小助が、お岩夫婦の息子・伊之助を連れて帰ってきて、髪が抜け、顔も腫れ上がって醜くなったお岩を見て驚愕します。お岩も、自分が伊右衛門らに騙されていたことに気づきます。そこへ伊右衛門が帰宅し、怒りと嫉妬に狂うお岩に、小助と密通したとの罪をなすりつけ、二人を斬ってしまいます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

(一般社団法人　義太夫協会発行)

**伊右衛門住家の段**

さして出でて行く

既にその日も入相の、鐘かうかうと告げ渡り、まがきにすだく虫の音も、いとど淋しき留守の宿。お岩はすめぬ案じ顔、いつか晴なん胸の闇、行燈取り出し火打ち箱、移す附け木の硫黄さへ、花なき夫の心根を、とやかう思ふ女気の、一人くよくよかこち言

「ホンニ浮世と云ひながら、水の流れと人の行く末、元この身は塩谷家の奧勤め、縁でかな伊右衛門殿に思はれて、お暇願うて嫁入りの、間もなう産んだあの伊之助、主の世継ぎと楽しんで、育つる甲斐も情ない。生まれ落ちると疳の虫、我が身は産の悩みより血の道と云ふ立ち病ひ、其上俄かにお家の騒動。思ひもよらぬ浪々に、尾羽打ち枯らす今の身の上。よくよく武運に尽き果てし、親子夫婦が身の上」

と、浮世を恨み身を託ち、そぞろ涙にくれけるが、思ひ蒿じて血の道の、逆上に思はずよろ〳〵〳〵

「アヽまた持病のこの逆上。どうぞ仕様はオヽソレ〳〵、最善水庵殿が下されし、加減の粉薬、幸い」

と、白湯にかき立て二口三口、飲むは毒とも神ならぬ、身の成る果てぞ哀れなり。跡にお岩はせきのぼす、胸の炎をおししずめ

「オヽそうぢや、ぼんの戻らぬその内に髪なとといておきましよ」

と、有合ふ鏡台引出し、かかる千筋の後れ髪、コハ心得ずとまた取り上げ、解く程抜ける額髪両手に丸めて打眺め

「ハテ合点の行かぬ今日に限ってのぼせの強さ、殊更髪のこの様に抜けるは病の業なるか」

と、言ひつゝ鏡の蓋取退け、向かへば写る怪しき顔、はつとびつくり立ち退いて、見れども辺りに人もなし、ハテ不思議なと立ち寄つて、また差向かふ鏡の影よく〳〵眺めて、ヤア〳〵〳〵いつの間に此顔が、この様に変はつたぞと、云ひつゝ我と我が顔をためつすがめつ目を留めて、見れば見るほど悪女の相好、ハアとばかりにどうと伏し、コハ何とせん悲しやと、狂気の如く立つ居つ、身悶えすれば胸先へ、持病のつかへが差込んで、そのままそこへ伏しまろび悶え苦しむ折からに、かかる事とはつゆ知らず、泣く子をすかして漸うと、帰る小助が門の口

「奥様さぞお待ちかね、何がモウ坊様がやんちやばかり、四谷中をあちこちと、すかし廻つて漸う只今、ソレちやつと添乳をなされませと、言ひつゝ立ち寄りこれはさて、御病中に大胆千万、宵寝惑ひのおうたたね。エヽちとお嗜みなされませ」

と、傍へに稚子そつと置き、見れば苦痛の其有様。

「ヤア是はしたり、また例のお癪が起こつたか、奥様申し〳〵エヽかてゝ加へて旦那はお留守、コリヤマアどうせう、何とせん」

かたへに有り合ふ土瓶のぬるみ、口押し分けて一口飲ませ、そのまま耳に口差し寄せ

「奥様、奥様いなう、お岩様いなう」

と、背撫でさすり様々と心を砕く介抱に、お岩は漸う息吹返し

「ハア。オヽ小助か戻りやつたか、さうして坊はどこに居やる」

「イヤモお気遣ひなされまするな、どうやらかうやら叩き付け、只今漸う寝かしましてごわりまする」

「オヽそれはマア〳〵嬉しうござる」

「アヽイヤ申し奥様、それはさうとお前様は、いつのまに其様おつとろしいお顔にはならしやりましたぞいの」

「さればいの、いつもの通り伊右衛門殿、八幡宮へ参詣と、出て行かしやつたその後で、あんまりのぼせが強い故、水庵殿の加減の粉薬、二口三口飲みし所へ、直助の権平が裏から忍んで横恋慕、様々口説くその中にも、伊右衛門殿は奥村の娘に深う云ひ交はし、わしに愛想を尽かさうと、相好変へる薬まで整へしとは聞いたれども、よもや夫がその様な非道な事はあるまいと、心で心取り直せど、のぼせは次第に強うなり、髪をすけば抜け落ちる、あまつさへ此顔の俄かに変はりし我が相好、ムヽさては権平が詞に違はず、奥村親子が工みにて水庵に言ひ含め、毒薬を飲ませしよな、おのれそのまま置くべきか」

と、すつくと立つて表の方、駆け出さん其勢ひ、小助は慌てて抱き止め

「コレ申し奥様、ソリヤ悪い御了見、権平が詞を信じ、奥村へござつても、先に覚えのない時は、こなたばかりか旦那の恥、サまずまずお心をとつくりとお鎮めなされて下さりませ」

「イヤ〳〵恥にならうが笑はれうが、モウかうなつた上からは姫御前の嗜みも、色を花香も捨たつたわいなう、サアとめずと放しや、そこ退きや」

と、互ひに争う帯の端、繻子のしやら解け因果のはし、挑み争ふ、折こそあれ。戻りかかりし羽宮伊右衛門、何心なく我が家の内、這入るも知らぬ両人が思はずばつたり行き当たり、互ひに見合す顔と顔

「ホこれはお旦那お早いお帰り」

とその場の首尾の手持ちなく、小助はもぢ〳〵控え居る、お岩は夫の胸倉にしがみ付いて

「コレ伊右衛門殿、ようも〳〵わしを騙し、毎夜〳〵ぬつけりと小梅と枕を交わしやつたなう」

と云ふも嫉妬のうわがれ声、角目立つたる形相に、驚きながらさあらぬ体

「ムヽ合点の行かぬこの場の様子、ガマそれは格別、その方が面体は何故にその様に見苦しくは変ぜしぞ」

「何故、何故とは、エヽ白々しいわいの、コレこの様に生まれも付かぬ片輪にしたも、皆こなさんの心から、サア元の顔にして返しや」

と、取りつき嘆くを取て突き退け

「ヤア言はしておけば様々な戯言、おのれ等こそ身が留守に帯紐解いて不義密通、主の目を抜く不忠者、成敗の重ね斬り、覚悟ひろげ」

と難題を、聞くより小助は律儀一遍、涙と共に膝突きかけ

「コレ旦那様、イヤコレ伊右衛門殿、この小助を不義者とは、ソリヤこなた無理だ〳〵、あんまりでござりますわいの。ホンニこの年月こなた様を世に出さうと、おらがこれ、このざまを見さつしやれ、盆も正月もコレ一点、日がな一日、町小遣いに駆け歩き、犬に吠えられ夜廻りの、お役人にはエヽ見咎められ、憂き艱難はいく何度、夜の目も碌に寝たことは、今の今迄ごはりませぬわいなう。それに気強い今のお詞、エヽ聞こえませぬ旦那殿」

と、畳叩いて恨み泣き。お岩も共に咳上げ〳〵

「上は女御お后より、賤しき賤の下々でも、連れ添ふ夫を大切に思ふは女の道なれど、お前に貧苦を見せまいと、濯ぎ洗いの賃仕事、心を砕く女房を、捨てて日陰のます花に、移り変るのみならず、覚えのない身に疑いは、日頃の気質に似合いませぬ、むごいわいな」

とばかりにて、恨みのたけを夕闇の、雲に篠つく村時雨、晴れ間は更に泣くばかり。伊右衛門は耳にもかけず

「ヤア曲にも立たぬ世迷言、念仏申して成仏せよ、南無阿弥陀仏」

と両人を、なぶり殺しに七転八倒、無慚といふも哀れなる。かかるところへ表口、息を切つて駆け来る水庵

「コレ〳〵伊右衛門殿、お岩殿の相好を変へた薬は我らが秘薬、皆奥村の母御の頼み、気の毒ながらお内儀を、手にかけられしはもつけの幸い、サアこれからは天井抜け、小梅殿とン盃事、誰憚らぬ三国一婿に成り済ました、しやん〳〵〳〵、えへへ、オホホ、ハヽヽサア〳〵早う」

とせき立つる、夫も今更後悔の詮方涙押包み

「現在女房子家来まで、不憫ながらも手にかけしも定まる過去の因縁事、しかし後難の恐れあれば、本意ならねど両人の死骸をば、納戸の戸板に打ち付けて、不義密通と書き記して、根無川へ押し流さん。こゝは端近奥の間で用意よくば裏道から、早う〳〵」

に

「実に尤も、幸い隣の団助を」

と、表へ出て隣の戸口そつと覗いて声ひそめ

「団助〳〵〳〵」

に、出てくる団助、水庵差し寄り耳に口

「ナア」

「ウン」

「ナア」

「ウン」

頷き囁き両人は、二人の死骸を引つかたげ奥の間さして入りにけり。最前より始終その様子、窺ひ聞いたる直助権平、物陰より現れ出で、

「ヤア、科なき女房家来まで成敗の羽宮伊右衛門、代官所へ注進」

と、駆け出す帯際引き戻し

「ヤアどこへ〳〵、大事を聞いたは汝が寂滅、覚悟ひろげ」

と斬付くる。こなたも我武者のだんびら物、二打ち三打ち戦ふ中、手練の羽宮に斬立てられ、逃ぐるをばつさり後袈裟

「イデこの上は我が子の死骸、せめて人目を包まん」

と、幸い片方に有合わす石を重りの水葬礼

「南無阿弥陀仏」

と井筒の中、打込む間もアラ不思議や、俄に家鳴り振動して、いづくよりかはあまたの鼠

「コハ心得ず」

とためらふ中、伊右衛門目掛け飛び掛かるを

「シヤ面倒な」

と斬払ふ、刀は稲妻、燃え立つ陰火、数は二つか三どもゑ廻る報いは末の世に、残れる四谷怪談の因縁かくと知られけり

【解　説】

　延亨二年（一七四五）大坂竹本座初演。並木千柳、三好松洛、竹田小出雲による全九段の世話物です。浪花の夏祭りを背景に、市井の男の友情と心意気を描いたこの作品は、人形浄瑠璃、歌舞伎ともに人気作となっています。

【主なあらすじ】

　泉州浜田家の家臣玉島兵太夫の息子磯之丞と恋仲の遊女琴浦は、横恋慕する大鳥佐賀右衛門らから何かと妨害を受けますが、魚屋団七と女房お梶、元侠客三婦や義兄弟の契りを結んだ徳兵衛が、二人を助けるために働きます。磯之丞は訳あって人を殺めてしまった為に、琴浦共々三婦の家に身を隠しています。たまたま徳兵衛の女房お辰が夫を迎えに備中から来たので、三婦は磯之丞をお辰に託すことにしました。そこへ団七の育ての親、舅でもある義平次が金目当てに現れ、団七に頼まれたと嘘をつき琴浦を連れ出します。それを知った団七は慌てて追いかけ、もみ合ううちに舅を殺してしまいます。捕り手に囲まれた団七は、徳兵衛の機転で一旦は逃れますが、ついには縄打たれてしまいます。しかし、磯之丞や兵太夫らがその減刑を求めるのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

(一般社団法人　義太夫協会発行)

**長町裏の段**

追駆くる

神と仏を荷ひ物囃し立てたる下寺町、高津の賑ひに紛れて急ぐ舅義平次、駕籠のを細引でぐる〳〵巻きのにはか網、追立て行くを後よりも

「オヽイ〳〵」

「アヽ駕籠の衆、早うやってくだされ、早う〳〵」

「待つた〳〵〳〵。コレ申し親仁様、この女中は知つての通り、恩ある方からの預り人、それをこなた、どこへ連れてござります。コリヤてつきりと悪者に頼まれ、金にする気であらふが、さふしられてはこの九郎兵衛の顔が、どふも立ちませぬ。コレ申し親仁様。エヽこなたは〳〵、こなたはなふ。このも内本町の道具屋で、田舎侍に出で立ち、贋香炉をもつて五十両の騙り事。エヽマ見下げ果てた。重ねてきつとと言うてからが、嗜む心もあるまい。ヤアコレ駕籠の衆、大儀ながらその駕籠、後へ戻して貰はう。サア早ふ〳〵」

「アヽコヽヽ、コリヤ待て、待て〳〵〳〵。なんぢや、たしなむ心があるまい。見下げ果てたとは、ヘ、忝ない。その愛想尽かし待つてゐたわい。コリヤ、六年この方おれが娘を女房にして、慰みものにして。サアせふかい」

「サアそれは」

「それはとは。ヤイ、アノこゝな恩知らずめが。コリヤヤイ、おのれは元宿無団七というて仲間の小歩き。貰ひ喰ひで暮してをつたを引上げて」

「アヽ申し〳〵親父様、なにもそれをこゝで仰しやらいでも」

「言うたらなんぢやい、言うたらなんぢやい。エヽ言はいでかい〳〵。その後堺の浜で魚売りさせ、まだその上にいつの間にやら娘のお梶とちゝくりやがつて、市松といふ子までへり出さしをつた。それからアノ月々の当てがひ。取るがよさに目をつてゐる中、乳守の町で喧嘩仕出だし、和泉のへ構つて、コリヤ百日の上女房子を、誰が養ふたと思ふぞい」

「サアそれはみな、お前様のお世話」

「ヤイ〳〵抜かすない〳〵。せめてその入目を入合はさふと思ふて、儲け事にかゝりや、おのれが道具屋の内にけつかつて、よふぼくを上げさしたな」

「イヤ、それはその場のツイ」

「まだ抜かすかい〳〵。今日琴浦をちよろまかして来たのはナ、惚れて居らるゝ佐賀右衛門殿へ渡し、にする気ぢやわやい」

「イヤサ、それではこの九郎兵衛がどふも顔が」

「立たぬ、立たぬか。アノ長々を養ふた、コヽ、この顔が立たぬかやい。ただしこちらの、コヽこの頬桁が立たぬか」

と、にはつたと蹴られても、『舅は親』と無念を堪へ、歯を喰ひしばりゐたりしが。

『とかく詫びるにくはなし』と、揉み手の上に膝折りかゞめ

「イヤ申し親仁様。段々の仰せ、一つとして返す詞もござりませぬ。長々お世話の上、またしても〳〵金儲けを妨げ、お腹の立つは御尤も。ガもふこれからはふつゝりとお邪魔は致しますまいが、あの女中のことばかりは」

「イヤならぬ」

「サ、左様でござりますれど」

「エヽならぬわやい」

「サヽヽヽそこでござります。折角あなたもこれ程までなさつた事。素手でお詫びも申しますまい。ヤ幸ひ友達共が、を致してくれまして、こゝに三十両ござりますれば、これをお前へ渡しませふ程に、身の代取つたと思し召し、琴浦殿を三婦が方へ戻して下され。外へやつてはこの九郎兵衛の顔が、どふも立ちませぬ。情ぢや慈悲ぢや、コレ親仁様、一生の御無心。申し〳〵コレ申し」

と、手引き袖引き膝をつき、無念涙の男泣き、親といふ字は是非もなや。義平次も三十両、当分取りに少しは柔らぎ

「その金われ、そこにあるのかい」

「ヘイ〳〵その金はこゝにござります〳〵」

「そりやアノ、ほんまの金かいやい」

「エヽほんまでござります。ヘイこの通りでござります〳〵」

「ム、琴浦をあつちへ渡せば、百両が物は確かにあれども、かゝりや繋がる娘の縁。よいは、ただやつたと思ふて、三十両で戻してやろ」

「エ、そんなら戻して下さりますか。ヤレ嬉しや〳〵」

「アヽコレ駕籠の衆、今乗せて来た所まで駕籠を戻して、駕籠代も酒代も存分先で取られい。暑い時分に御苦労ぢやがモウ一肩やつてくれ」

「ヤ駕籠の衆、確かに届けて下されや。暑い時分ぢや、御苦労ぢやが頼んだぞや〳〵〳〵」

「コヽヽ兄、兄。マヽこつちやへ来い、マヽこつちやへ来いやい。へヽヽヽヽ兄、暑いの、エヽ暑いの」

「ヘイ左様でござります。ヤモきつい暑さでござりますな」

「コヽ兄。そなたは定めて嬉しかろの」

「イヤモ、この様な嬉しいことはござりませぬ。親仁様、ありがたうござります、ありがたうござります」

「ヲヽさふであらう〳〵。時に俺にもどふぞ、悦ばして下されいの」

「ヤ、悦ばせ、とはなんでござります」

「ソレイノ〳〵、今の、ノ、ソレ約束の」

「エヽ、約束の。ソリヤマアなんでござりましたな」

「これはしたり。あんまり日が長いので、物忘れをしおったかいのハヽヽヽヽ、ソレ今の約束の三十両、受取らふかい」

「エヽそのカヽヽ金でござりますか。その金はこゝにはござりませぬ」

「チエ、ヤレその駕籠やるのぢゃない、駕籠戻せ〳〵」

「申し〳〵、親仁様〳〵〳〵。マヽヽヽ、待つて下され〳〵〳〵」

「エヽ腹の立つ〳〵。うま〳〵一杯やりをつたなア」

「イエ〳〵なんの申し、左様ではござりませぬ。うちへ帰れば心当てが。マヽマア〳〵こゝを放して下さりませ〳〵〳〵」

「ヤアどこへ〳〵。うぬがやうなめは、かふして腹癒ようか、かふしてくれうか〳〵」

と、捻ぢ廻し引廻せば

「ムヽ」

「その面付きなんぢやい。肩臂張つてその眼付きなんぢやい。コリヤヤイ、舅は親。アヽ慮外ながら、親に向つて白眼ケヽヽ蹴潰すぞよ」

「ム、ム」

「無念なか、口惜しいか。ムハヽヽ泣くかいやい。アヽ可愛や可愛やな。ドヽヽ、その頤をこの雪駄の皮でさすりいがめてやろか。コリヤこの頬桁で俺を騙しやがつたか。コヽこの口で騙しやがつたなコウ〳〵〳〵カープツ、これ喰へ」

「ア痛た、アヽ。親仁様。モこれ程になされたら、御存分でござりませふ。モウ〳〵御了簡なされませ〳〵。プーツ、コリヤコレ男のを」

「割つた。割つたがどうした」

「ウム、コリヤモウいつそ」

「なんぢやいな〳〵〳〵、おのりや脇差をびこつかして。アヽコリヤ面白い。サア〳〵斬れ〳〵」

「アヽイヤ申し滅相な〳〵」

「サア斬れ、イヤ斬らりょ。サア斬れ、この赤鰯でやつて見るか」

「アヽ申し危なふござります〳〵」

「アヽ斬らりょ、斬れ〳〵」

「なんのわたくしがお前様を」

「イヤ〳〵切る気であらふ。コノ尻からやるか。サア、斬れ〳〵」

「アヽ滅相な〳〵」

「コノ腕からやるか。サア斬れ〳〵〳〵、斬れ」

「ムヽヽヽ」

「コリヤ、親ぢやぞ、親ぢやぞよ。一寸斬つたら一尺の、竹鋸で引返す。サア斬れ〳〵〳〵〳〵」

「アヽ申し危なふござります〳〵」

「突け〳〵〳〵」

と、差し付け突き付けせり合ふ中、思はず舅が耳の根ずつくり

「サア、サヽ斬れ、何しとるんぢゃ、斬らぬかやい、斬る気であらふが」

「アヽ危なふござります、危なふござります。危なふござります」

「アツ、冷めた。兄、わりやおれを斬りやがつたナ」

「なんの滅相な」

「ヤレ人殺しぢや」

「申し怪我でござります、怪我でござります」

「イヤ〳〵親殺しぢや〳〵〳〵」

「アヽコレ、声が高い〳〵、声が高ふござります、声が高い〳〵。ム、コリヤモウ是非に及ばぬ、毒喰はば皿」

〽てうさぢや、ようさぢや

「てうさぢや、ようさぢや、てうさ、ようさ〳〵〳〵。悪い人でも舅は親。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

八丁目、指して